

2019年 冬号

笑顔と心をつなぐネットワーク 明社通信

# HEARTFUL

はーとふる

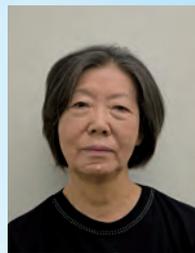
## 新春対談 新たな出発

連載

Meishaアーカイブ～50年の歩み～

被災地レポート 「わすれない、いつまでも」

世界の現場から日本が見える



## 未来へつなげるための運動に

明るい社会づくり運動群馬県連絡協議会理事

細井利江

明けましておめでとうございます。災害のない、明るく、爽やかな一年でありますよう……。また、皆さまのご健康を祈念申し上げます。

さて、私の所属する「高崎明るい社会づくりの会」では、二つの事業を柱に活動の取り組みをしています。一つはかるた大会です。

『明るい社会づくりかるた』は、高崎明るい社会づくりの会の新井三知夫前会長の「21世紀を背負う大切な子どもたちはもちろん、すべての人びとが心のあり方を正して行ってほしい」という願いで製作したものです。それは、新井前会長がニューヨークの国連前広場を訪れたとき、本運動の提唱者・庭野日敬師から「平和は簡単にできない。良い子を育ててください」という言葉を胸で温めつけて文字札にしたものでした。絵札は、高崎市の教育長が各学校へ募集を呼び掛けてくださり、応募された中から選ばれたものです。そのため一枚一枚の作者が違うので、さまざまなタッチの絵札があります。そのかるたで毎年、「かるた大会」を開催しています。子どもたちが、かるたで遊ぶなかで書かれている内容に心に残えつけてもらい、大人になったときにそれが生かされることを願っています。

二つ目は、高崎市で毎年開催されている「日本選抜車いすバスケット選手権大会」のボランティアに参加していることです。この大会は29回を数え、事務局一人を除いた全員がボランティアです。

高崎明るい社会づくりの会は受付と館内整備、そして、汚れた車イスはコートに入れないので、車輪を拭く手伝いをしています。他の部門では、テーブルオフィシャルを担当する高校生や、試合前と試合中にコートを拭くモップ係、選手の水分補給をするためのドリンクサービス、さらには選手とボランティアスタッフ昼食時の豚汁を作る係等々、アリーナのどこを見回しても青年たちががんばって運営をしてきている姿が見られます。なかには親子でボランティアに参加して下さっている家族もいて、一年に一回の開催なので、「一年のご無沙汰でした」という挨拶の言葉を交わします。こうしたボランティアを通して、親から子へバトンタッチをし、さらには子から孫へと繋げていけるとどんなに素晴らしいことかと思っています。そして、障がいを持った方も大会を支えるボランティアも同じ仲間として一緒に取り組めることで絆を深めています。

今年も、明るい社会づくり運動の提唱から50年に当たります。この運動に携わった先輩の方々のご努力があつて現在まで継続しています。

4月27日には、メルパルク東京（東京都港区）において提唱50周年記念大会が開催されます。これまでの50年を振り返り、これからの50年、100年後に、この運動を続けていくにはどうしたらよいかを考える機会としていけたら幸いです。

### かがやき 耀メッセージ

- 1…… 特集 新たな出発
- 6…… 1枚の書き損じハガキから笑顔が生まれる——「ラオスに井戸を贈る運動」
- 9…… 被災地レポート「わすれない、いつまでも」
- 11…… Meisha アーカイブ ～50年の歩み～
- 12…… われら明社人
- 14…… 掲示板
- 16…… 世界の現場から日本が見える  
明るい社会づくり運動 提唱50周年記念大会のお知らせ  
耀！連隊 明社レンジャー

## Contents

はーとふる 2019年冬号

### 目次

新 対 2019  
春 談

# 新たな出発

新春のお慶びを申し上げます。  
本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。



特定非営利活動法人明るい社会づくり運動 常務理事

特定非営利活動法人明るい社会づくり運動 理事長

澤田章好



砂川敏文



提唱者の本来の心に沿った歩み方をしていけば、  
方向を間違えることなく、進んでいけるはずです。  
明るい社会づくり運動の『天命』をかみしめながら  
進んでまいりたいと思います

## 砂川敏文 (すながわ としふみ)

1948年生まれ。香川県出身。1970年、帯広畜産大学卒業。1970年、農林省入省。北海道開発庁大臣秘書官、帯広開発建設部次長等を歴任し、1997年、北海道開発局官房調整官を務め退任。1998年4月の帯広市長就任し、2010年4月退任。2011年、特定非営利活動法人明るい社会づくり運動理事、2014年7月1日より理事長に就任。

## 節目の年を迎えて

**砂川** 新年あけましておめでとうございませう。昨年は自然災害に見舞われ、多くの方々が大変な状況におかれまして。本年は穏やかで幸せな年になるようお祈りしながら、運動に取り組ませていただきたいと思います。よろしくお願ひいたします。

**澤田** 私は以前、大分県と長野県で明るい社会づくり運動にかかわらせていただいた経験がありました。昨年7月からは特定非営利活動法人明るい社会づくり運動(以下、全国明社)の常務理事のお役を頂戴いたしました。精いっぱい、務めさせていただきます。よろしくお願いいたします。

**砂川** 今年は、4月から5月には、平成天皇から次の天皇に代替わりをするという慶事があり、明るい社会づくり運動においても提唱50周年という記念すべき年を迎えました。節目の年に、澤田さんが全国明社の常務理事としてご参加いただけたということは、明るい社会づくり運動にとっても有り難いことでもあります。

**澤田** 明るい社会づくり運動も50周年、論語で教えるところの「50にして天命を知る」に従えば、その「天命」を知るときがきたのだと思います。「天命」をきちんと確認し、次の来るべき半世紀に向かって進んでいく時期を迎えたのだと思っております。そういう点では、少しでも尽力できればと思っております。

**砂川** 新しい「命」を確認するときにきたのかも知れませんが、とはいいながらも、庭野日敬師(にののひかこうし)が明るい社会づくり運動の提唱に込められた思いを大切に持ち続けていきたいですね。なぜなら、提唱の理念は、時代が変わろうとも、場所がどこであろうとも、誰にでも通じる普遍的なものです。社会を明るく住みよくしたいというのは、いつの時代にあっても誰もが願っていることなのです。

**澤田** 立正佼成会の開祖である庭野日敬師が、明るい社会づくり運動を提唱されたのが昭和44年でした。当時を振り返ってみますと、昭和初期には、みんな貧しい時代をすごしてきたのが、著しい経済成長で、未来はバラ色のごとく、みんな前へ前へと進みはじめました。「大きいことはいいことだ」というコマーシャルが流れるなど、そうした風潮のなかで、提唱者は人びとの心の荒廃に危惧を抱かれたのでしよう。そこで「明るい社会づくりをみんなで行きましょう!」と、多くの市民に呼びかけられた。それは、人びとがもともと持っている善意の心を発揚しながら運動を進めたいという願いからだったと思います。

**砂川** 生活がどれほど豊かになっても、心が豊かでないければわびしいものです。人さまの役に立つことや社会に何かしらの貢献をするということが心を豊かにし、幸福感をもたらしてくれるのでしようね。

**澤田** 提唱者は、地域住民の方々に参加していただくために組織化を図ったのだと思います。こうした組織づくりの過程を私は船に例えて考えてきました。つまり船は作られたけれども、その船が何で



変えるべきときに、変えなくてはならないことを見極めながら進めていくという大切な時期を迎え、そこに参画できたことに喜びをもって進んでいきたいです

**澤田章好** (さわだ あきよし)

1955年生まれ。東京都出身。1979年、早稲田大学社会科学部卒業、同年、立正佼成会学林入林。中央学術研究所、立正佼成会渉外部広報課、中央学術研究所学術研究室室長、中津教会長、長野中央教会長等を歴任。2017年より立正佼成会理事、責任役員。2017年7月、特定非営利活動法人明るい社会づくり運動理事、2018年7月より常務理事に就任。

あるのか、客船なのか、タンカーなのか、貨物船なのか、釣り船なのか……。目的を明確に定めずに船を出してしまっただのではないかと思うのです。

**砂川** 船にはバラストも必要ですよな。

**澤田** そうですね。船というのは一定の重みを必要とし、喫水線を下げないと安定がとれません。だから提唱された意味を理解していた立正佼成会の会員に、まず乗っていただいたのだと思います。ところが、その会員が乗ったままその船は航海を続けてきました。

**砂川** 50年たつて、各地区の明るい社会づくり運動のみなさんも、自分たちの船が何であるのかを考える時期かもしれませんね。カタチを変えることも、あるいは、これまでどおり客船でよかったと思われているところもあるでしょうし、逆にタンカーにしたいという考えもあるでしょう。

**澤田** 航海していくなかで、乗船者が立正佼成会の会員の割合が多く、地域住民の方たちが乗れなかった、というようなこともあったのではないかと……。と……。

**砂川** 明るい社会づくりに携わる人びとの集合体と考えるならば、そのなかに立正佼成会の方もいらっしゃるれば、地域住民の方々もいるということでしょう。さまざまなたちと一緒に運動を推進していくというのが基本的な考えだと思っております。

**澤田** 提唱者は立正佼成会に抱え込むために組織をつくったわけではありません。ですから、初代会長

を前田義徳さん(元NHK会長)にお願いし、その後、井深大さん(元ソニー名誉会長)、福田赴夫さん(元内閣総理大臣)、石原慎太郎さん(元東京都知事)に担っていただきました。

**社会変革のなかで**

**澤田** 提唱から50年経って、いま、ようやく提唱者の願い、理想にだれもが気づきはじめる、多くの方々が見るいい社会を築くための取り組みをしています。

**砂川** 自分のことより人のことを最優先するという時代がきましたね。最近、厚生労働省が、戦後から繰り返す同じ質問を設け、国民に行っている意識調査を目にしました。その意識変化を表すデータには、50年前といまでは様変わりしている調査結果がありました。先ほどの話でいえば、「自分のことだけでなく、人のことも考えないといけない」と思っているかどうか」という質問に、50年前は、「自分のことだけ考えればいい」と思っている人が多数派でした。ところが、最近では、「自分のことも考えるけれども、人のことも考えないといけない」と思っている人が多数派になっています。いろいろな要因があるかもしれませんが、他者への思いを抱く人たちが増えているということですね。

**澤田** 社会変革が影響しているのかもしれないですね。阪神・淡路大震災のあった1995年が、「ボランティア元年」といわれるように、そこを境にボランティアが盛んになってきたように思います。個人の心もちが変わってきたのでしょうか。それまではボランティアというと、キリスト教や仏教をはじめとした宗教者が得意とするところのように思わ



れてきましたが、阪神・淡路大震災を起点に、それ以降のボランティアの活躍は見逃せないポイントだと思えます。全国明社も迅速に対応し、ある意味でモデルチェンジを図っていく機会だったと思うのですが、なかなかそのことに気づけませんでした。まだまだ組織を維持することに意識が向いていたという反省点があります。

**砂川** 社会状況が変化して、自分のことだけではなく、本当にみんなの役に立ちたいという機運が高まってきたことを大切に考えたいのです。

**澤田** いまは、他の組織、団体などにもボランティアの担い手がたくさんいます。世相の変化とともに、自分の思い、理想にどうしたら効果的に取り組んでいけるかを考えていく必要があるのではないのでしょうか。

## 新たなカタチの模索

**砂川** 50周年を契機に組織を整え、世の中の状況に合わせて取り組む方法を模索していく必要がありますね。しかし、何をやるにしても資金が必要で、少しでもご協力をいただければありがたいことです。これは全国明社に限ったことではありません。それぞれの地域へ広く目を向けて呼びかけて、「協力するよ」とおっしゃってくださる方に、明るい社会づくり運動が主体になって開催するイベントに協賛金をお願いするとか、前向きに取り組んでいくことが大事かもれませんね。

**澤田** 最近では、利益を社会貢献に活用したいという企業が増えています。財団の設立やさまざま

な取り組みを始めています。私も常務理事という役をいただいているから、いろいろ考えました。明るい社会づくり運動の財政基盤は、個人の賛同者の会費によるところが大きいわけですが、「みんなで明るい社会づくり運動をつくっていきましょう」ということを考えたなら、個人だけに目を向けるのではなく、企業にも運動の趣旨をご理解いただき、参画していただくことも大切ではないかと思えます。

**砂川** 自治体や行政は、「みんなが楽しく安心して住める町をつくらう」というのが役目で、基本的には、明るい社会づくり運動は同じ方向を目指しているのです。

**澤田** 本当におっしゃるとおりです。行政も企業も目指すところは一緒です。明るい社会を築いていくことです。

**砂川** しかし、社会貢献団体はたくさんありますが、明るい社会づくり運動のような広域の組織は類を見ないですね。

**澤田** 全国ネットワークですからね。そのメリットを生かした活動を全国明社は取り組んでいくことも大事ですね。また、明るい社会づくり運動は、「この指とまれ」運動でもないのではないかと考えています。それは、「こんな催しをしますよ」と呼びかけて、それに賛同した人たちが、参加してくださるというカタチです。SNS（ソーシャル・ネットワークキング・サービス）などを駆使していくと、広がりがあるのではないかと……。

**砂川** 明るい社会づくり運動には、全国に500



を超える地区組織があります。しかし、すべて同じ活動をする必要もないわけで、地区明社の方たちがやりやすいように、それぞれに考えていけばよいのではないかと考えています。実は、私は山登りをするのですが、山を登るのにもいくつかの登山道あります。それぞれ自分にふさわしい道で頂上を目指していくわけで、明るい社会づくり運動も同じではないでしょうか。

**澤田** そうでしょうね。しかし、気持ちはあってもなかなか一歩を踏み出せないでいる方もいます。明るい社会づくり運動は、一歩を踏み出すきっかけをつくってさしあげることも大事かと……。

**砂川** 何らかの取り掛かりから参加して、そこから自分で考え発展させていく人もいます。実は、私はある市民講座で話をする機会をいただいたのですが、そのときの話を聞いた人が、「ボランティアなど社会貢献をやりたかったが、なかなかきつかけがなかった。でも、砂川さんのお話を聞いて一歩を踏み出せた」とおっしゃってくださった。うれしかったですね。その人の背中を押してあげられたという喜びです。

以来、きつかけをつくることの大切さを感じています。澤田さんも全国の明るい社会づくり運動のみなさんに、一歩を踏み出させてあげられるようなお話をしてください。もちろん私もさせていただきますよ。

**澤田** そうですね。みなさんのもっている善行の気持ちを引き出す縁となること、それが提唱に込められている本来の願いなのだと思います。

### これからの歩み

**澤田** 私は、明るい社会づくり運動の未来は明るいと思います。経済的には課題点もあるかも知れませんが……。どのように協力を仰ぎながらみんなと一緒に取り組んでいくのか、いわば協働で取り組むという方向性を示したいですね。そのなかで、若い世代の参画が少ないという見方がありますが、若者はボランティアをすることに對して抵抗はなく、声をかければ喜んで参加くださる方が多いように思います。

**砂川** 若い世代の人材のことでは、理事会でも議論を交わすことが多いのですが、ボランティアに参画する人ではなく、組織を維持していくための人材がないということのようですが、その課題を少しでも解消していく推進役は、全国明社の役割の一つだと思っています。

**澤田** 若い人は束縛されるのを嫌う傾向がありますが、自分にフィットしたら、ものすごい力を発揮します。そうした若い世代へのアプローチの仕方を考える必要があるように思います。すでに、精力的

に活動している若い世代がいるので、そうした若者たちと、ゆるやかなネットワークを組みながら協力していくことも考えられます。それをどのように呼びかけて、どのように協働で取り組んでいくか、しっかりと考えていく必要がありますよね。

**砂川** みんなで協力し合い、柔軟に対応したほうがいいのではないかと思いますね。

**澤田** 「50にして天命を知る」というところでは、本当に切り替えられるいいチャンスなのに、常務理事というお役をいただけたことをうれしく思います。そうでなかったら、このようなことを考えることもなかったでしょう。変えるべきときに、変えることはならないことを見極めながら進めていくという大切な時期を迎え、そこに参画できたことに喜びをもって歩んでいきたいですね。しかも、砂川理事長さんと一緒にいることがありがたいです。

**砂川** そうですね、皆さん共に考えていただき、よい良い運動を推進していければうれしいですね。効果的に実現していくためには、運営の仕方や方法などは変わっていくものもあるかもしれませんが、まだまだ社会情勢は、変わっていくでしょう。そうした情勢を見据えながら、それを受け止めて進めていくわけですが、提唱者の本来の心に沿った歩み方をしていけば、方向を間違えることなく、進んでいけるはずですよ。だから、社会情勢がどんなに変わるうとも、変えてはいけなないものは、提唱者の理念だと思っています。そして、私も50周年という節目に居合わせられたことに感謝し、明るい社会づくり運動の「天命」をかみしめながら進んでまいりたいと思います。

Meisha  
アーカイブ  
～50年の歩み～

第4回  
人材育成



清沢 工子さん  
(岩手県盛岡市在住)

明るい社会づくり運動は、昭和60年代に入ると各地での市町村単位組織はさらに拡充し、活動母体の整備も進み、独自の活動で成果を挙げる地域が増えてきました。また、国際化の進展に対応して、難民救済や外国人留学生の援助、交流、隣国とのスポーツ交歓など、国際活動に取り組み府県も出てきました。こうして活動分野が拡がり、深まりを増すにつれ、つまるところ人づくりにかかってくるということがますます痛感されるようになりました。そして、常設の人材育成機関の設置を求める声が強くなりました。

この育成機関については、全国リーダー研修会や「全国会長会議」などで希望・意見・提言が集められ、昭和62年(1987)10月18日に開催された第四回全国大会の大会テーマ「拓」にちなんで「首都圏拓塾」(のちの全国拓塾)と名付けられ、翌63年(1988)9月24日に開塾しました。それに先立ち、全国のなかでも積極的な取り組みをみせた「岩手拓塾」は5月に開塾しました。今号では、当時、岩手拓塾に携わられた方々のお話を紹介します。

「明るい社会づくり運動全国協議会」(当時)の重点事業として「拓塾」構想が打ち出されてから、「明るい岩手づくり推進協議会」(当時)でも開塾準備を進めてきました。そして、全国に先立ち、「岩手拓塾」を発足し、昭和63年(1988)5月28日に開塾式を行いました。塾生は、県内各地の30代を中心とした35人でした。

私は、設立スタッフとして携わっていましたが、郷土の先哲である宮沢賢治さんの思想や考えをベースに置いて、明るい社会づくり運動の理念のほか郷土である岩手県が抱える諸問題や地域の特色を踏まえた研修内容に、何か胸をワクワクさせるものを感じていました。そして、実際に研修がはじまると、受講生たちが目を輝かせて、生き生きと学ぶ姿を見

るにつけ、次代を担う若い世代の人たちへの期待が膨らんでいくのでした。

心に時かれた種は、いつか芽を出し、それぞれの花を咲かせます。間もなく卒寿を迎える私ですが、受講生のみなさんがいまも地域のリーダーとなって活躍されている姿に喜びを感じています。



「拓塾」講座シリーズ(全8巻)



昭和63年(1988年)9月24日に開塾した「首都圏拓塾」。写真は3期生の研修



七木田 芳生さん  
(千葉県千葉市在住)

30数年の歳月が流れ、記憶と学びは薄れてしまいましたが、花巻で開催した「岩手拓塾」の研修は印象に残っています。

古い木造校舎のような施設での研修は、宮沢賢治の世界に入っていくのにとってもふさわしい雰囲気でした。宮沢賢治は地元の偉人であり、童話などの作品は断片的ではありましたが知っていました。しかし、大人になってあらためて「賢治先生の心」を学んでみて、生きていくうえで大事なことを教えていただきました。

研修の最後に、「精神歌」を参加者全員で合唱したことも思い出されます。

「拓塾」で学んだことは心の中で、わずかな灯りとなってともしり続けていたのかもしれない。昨年の秋には現在の住まいがある千葉で、「明るい社会づくり運動千葉市フォーラム」の清掃奉仕に参加しました。

月日はたち、郷里の盛岡を離れて暮らしている私は、ともすると自分中心の生き方をしてしまうことがあります。

それでも当時を思い出すとあらためて、出会う人にひと時でも和やかな気持ちになつていただくと、心ななを心がけたいと思います。



昭和63年(1988)5月28日、岩手拓塾開校式



佐藤 昇さん  
(岩手県宮古市在住)

「岩手拓塾」の三期生だった私は、塾頭の藤川智美さん(現在、特定非営利活動法人明るい社会づくり運動理事)のもとに結末して学んだことが、昨日のことのように脳裏に浮かんできます。

当時、北海道旭川市で始まった「夢灯りキャンドル」が盛岡に伝わり、それが研修のなかで取り上げられました。

それをきっかけに、地元の宮古地区で導入し、今日まで26年間継続して実施しています。なかでも震災の翌年には、犠牲になられた御霊の鎮魂として

「鎮魂の夢灯り」が点火されました。夕闇に包まれたふるさとの街に、「人びとに永遠の安らぎを」と願う灯りは多くの感動を与えています。

若い人に夢を与え、明るい未来を築いていけるように、これからも地域の仲間とともに「夢灯り」に取り組んでいきます。



「明るい社会づくり運動首都圏拓塾」が編集・発行していた「拓塾つうしん」創刊号